

「3歳までの命」といわれ41歳まで輝いて生きた えびちゃん

2022/4/14

安齋順子 獨協医科大学附属看護専門学校三郷校 専任教員 22S1004

ゆきさんへ

第1回目の講義を終えて、あー！修士課程の講義っておもしろい！と思った。

私は、小児看護学科目責任者で先天性疾患を持つ子どもと家族とか、障害のある時への看護とかわかりやすく教授していたつもりだったが、「ガツン！」と殴られた気分になった。

「存在の肯定」

小児看護学実習では、重症心身障害児を受け持つことが多く、児とその親への援助をする。もし、重度の障害を持って生まれてくる赤ちゃんに対し「おめでとう」って思うのか、親でさえ児の存在を受け入れがたい思いを学生に伝えられていたのだろうか。

「何かあったら大変」

医療従事者はこのフレーズをよく口にする。考えを押しつけていたんだ、信じてあげられなかったんだ、傷つけていたんだと思った。

「命に価値なんてない」

私達は、役に立たなければならぬと教育されてきた。しかし、ただ生きていることの素晴らしいと感じるし、そういう自分でありたい。正解を求めて同じなら安心していただけ、本来、色々な考えがあって当然である。「まあ、そういう考えもいいよね」とか「できなくたっていいじゃない」って受け入れられる人のなりたい。

「共生」

自分とは違ういろいろな人との出会いや考え方、つまり、多様性を受け入れられるって素晴らしいと感じるし、そういう自分でありたい。正解を求めて同じなら安心していただけ、本来、色々な考えがあって当然である。「まあ、そういう考えもいいよね」とか「できなくたっていいじゃない」って受け入れられる人のなりたい。

私なりの言葉で、共に生きることとは、その人を受け入れて信じ抜くことだと思う。
ありがとうございました。